S.　Ashina

＜前回＞オリエンテーション・導入

授業スケジュール

前期：初期キリスト教から古代キリスト教

オリエンテーション――キリスト教思想史について

１．キリスト教の成立と初期キリスト教

２．キリスト教の制度化と初期カトリシズム

３．ヘレニズムのユダヤ教

４．グノーシス主義

５．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家

６．キリスト教教父２――オリゲネス、アレクサンドリア学派

７．キリスト教基本教理の形成

８．キリスト教の国教化

９．キリスト教教父３――アウグスティヌス　6/23

１０．研究発表・角元　6/30

１１．研究発表・岡田　7/7

１２．研究発表・長岡　7/14

１３．研究発表・山本　7/21

１４．研究発表・金　7/28

＜基本教理の形成＞

（１）正統と異端

１．歴史的コンテクスト：国教化→政治宗教・政治神学

正統教会―正統教義―正典化

２．国教体制：宗教と政治の相互補完、帝国の統一のための宗教の統一（正統教会の成立）

３．教会会議における決定と争点

ニカイヤ公会議(325)　：父と子のホモウーシオス（同本質）

カルケドン公会議(451)：キリストの本性を巡って（両性論か単性論か）

４．養子説・仮現説・様態説→三位一体論とキリスト論との錯綜した議論・論争

（２）正統教義：三位一体論とキリスト論

６．ドグマとは

(1)防御的意図：何であるかよりも、何でないか

(2)実践的意義：救いの確実性をめぐって（キリスト論における救済論的意味）

７．「一つの本質、三つの位格」

西：substantia ----- persona　　東：ousia　　-----hypostasis

８．内在的三位一体と経綸的三位一体

９．キリスト論・カルケドン信条：真の神、真の人間、totus homo, totus Deus

キリスト両性論(The Dogma of the Two Natures in Christ)：父と子と聖霊との同本質性

→ 第二の persona であるキリストの内部における神性と人性の関係について、解釈の幅がある

①　キリストの人性を強調（養子説のライン）

②　単性論（Monophysitism：様態説のライン）

（３）キリスト論とその現代的意義

10．両性論と実体形而上学のアポリア→苦しまない神

変化を被らない神・パッションをもたない神は、聖書の神か？

→ プロセス神学の試み（ハーツホーン）

神の受動性と能動性の両面

→ 神と人間の本来的関係性の歴史的現実化（ティリッヒ）

11.「弱き神」論　→　「付論　キリスト教思想―聖書の神と哲学者の神―」

ケノーシス（フィリピ）、十字架につけられた神（モルトマン）、神の痛み（北森）

＜文献補足＞

１．ジョン・Ｍ・Ｌ・ヤング『徒歩で中国へ――古代アジアの伝道記録』イーグレープ。

２．落合仁司　『〈神〉の証明――なぜ宗教は成り立つか』講談社現代新書。

３．坂口ふみ　『〈個〉の誕生――キリスト教教理をつくった人びと』岩波書店。

８．キリスト教の国教化

（１）公認・国教化の意義

１．キリスト教の公認と国教化

313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）

325：ニケア公会議

381：コンスタンティノポリス公会議

392：国教(テオドシウス帝)

２．政治的秩序と宗教的秩序の相補性

天上の秩序と地上の秩序、天の統一と地の統一（上と下との照応性、照応の論理）

↓

政治神学　　cf. 近代的な政教分離

３．政治的要請としての「正統―異端」論争

宗教的要因との関連性の問題

多様性を保持しつつ、異端との対応で徐々に正統教会へ

・近代日本におけるキリスト教合同問題

・ポスト・プロテスタント時代のキリスト教

ティリッヒ

４．三位一体論の意義

・国教会＝正統教会の基盤となる教理→その後のキリスト教世界の基礎

・独裁的絶対的な神理解への批判契機（モルトマン）、多様性の保持

（２）国教化の帰結

５．国家神学・政治神学としてのキリスト教神学

「神学」：キリスト教の発明ではない。古代ギリシャ起源。

ストア哲学の神学区分（アウグスティヌス）：

民衆の神学（神話）

国家の神学（ポリスの国家儀礼）

自然の神学（哲学）

↓

キリスト教による「神学」の変革

キリスト論の意義（ダルフェルス、芦名定道『自然神学再考』晃洋書房）

６．「国家の神学」を組み込むことによって、キリスト教神学の成立過程は完了した。

↓

政治神学（シュミット）

７．絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ。

キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。

パウロの国家論の意義（宮田光雄）

８．アウグスティヌスの「神の国」論

「四世紀終わりから五世紀初めにかけて、キリスト教は、忍耐から確立へと変遷した。伝統的なローマの祭礼は国の支持を失い、皇帝たちは、キリスト教の神をローマの運命の保証人として頼りにしたのだった。ミラーノの司祭、アンブロシウスはローマ皇帝にユダヤの王という聖書のイメージを適用することによってこれに答えた。ヒッポのアウグスティヌスは、キリスト教徒の支配者による戦争の遂行を正当化した地の国と神の国の相互補完の理論を展開した。」（マーカス、162 頁）

↓

このアウグスティヌスの意図とその後の影響史・解釈史との区別、そして関連。

９．現代的問題：キリスト教と公共性

国教会体制後の政治的状況で、なおも、正戦論にとどまるのか。
国民国家・民族主義を超えた普遍性の実現を試みるのか。

↓

下からの公共性、ネットワークとしての公共性

＜参考文献＞

１．Ｊ．ヘルジランド、Ｒ．Ｊ．デイリー、Ｊ．Ｐ．バーンズ
『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館。
２．アウグスティヌス　『神の国』岩波文庫。
３．R.A.マーカス　『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。
４．宮田光雄　『平和の思想史的研究』創文社。
『平和のハトとリヴァイアサン――聖書的象徴と現代政治－』岩波書店。

『非武装国民抵抗の思想』岩波新書。
『国家と宗教――ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店。
５．シュミット　『政治神学』未来社。
６．Ｊ．モルトマン、Ｊ．Ｂ．メッツ　『政治的宗教と政治的神学』新教出版社。
７．深井智朗　『政治神学再考――プロテスタンティズムの課題としての政治神学』
聖学院大学出版会。
８．アガンベン『ホモ・サケル――主権権力と剥き出しの生』以文社。
『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。
９．「宗教的寛容」研究会： http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/tolerantia/index.html
「近代/ポスト近代とキリスト教」研究会：
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/modernity/index.html